

世が言う「普通」とは何か。皆が口にする「普通」に恐らく私は入っていない。そもそも「普通」じゃないことはいけないことなのだろうか。

私は幼い頃から可愛いものが大好きで、可愛らしい格好をするのも好きだった。けれど、母親からはあなたには似合わないし、そんな格好はみつともないから辞めなさい、普通にしていちようだい、と言われ続けてきた。髪を伸ばすことさえも許されなかった。自分の感情を抑えつけ、着たくもない洋服を身に纏い、世の中の「普通」になるべく従順するように生きてきたつもりだった。

母は私の気持ちを考えたことがあるのだろうか。私の気持ちを勝手に決めつけ、それによって苦しむ私を知っているのだろうか。知ろうとしたことはあったのだろうか

私は何のために普通を装い、何のために生きているのかさえもわからなくなるのだった。辞めてしまいたいとすら思ってしまう。…辞める？何を？

そんなある日、私は何かプツンと切れる音を聞いた。はつきりと鮮明に何か切れた音を感じ取った時にはカッターナイフを左の手首に当てていた。その時、一階のリビングからは母が咳き込む音が聞こえた。

そんな生活にも耐えながら、一刻も早く逃げ出そうと、必死にアルバイトをして貯めたお金で今は自由に一人暮らしを楽しんでいる。好きな格好をして、髪の毛も綺麗に伸ばして、自分らしく生きることで自信を持てるようになった。そして、こんな私でも受け止めてくれる素敵な人に出会うことも出来た。

彼と生涯を共にすることを決めた。まだ親にも認められていないし、何なら国にも認めてもらえていない。けれど、これが本当の私で、本当の幸せ。私はあの時辞めたのだ。男である私を。